

ビッグバン

それは気配だった

それはことばだった

それは冴え冴えとした意志だった

それはある瞬間のことを予感させる

気配だった

それはあるものをあらしめようとする

ことばだった

それは冴え冴えとして強い

意志だった

光もなかった

闇もなかった

時間もなかった

空間もなかった

ないものもなかった

その瞬間がどこからきたのか

知らない

その意志がどこから発せられたのか

知らない

その激情がどう生まれたのか

知らない

その光がどう走り始めたのか

知らない

その闇がどう垂れこめたのか

知らない

その時間がどう刻み始めたのか

知らない

その淡い空間がどう漂い始めたのか

知らない

それはある気配だった

永遠について

だれもない縁側にランドセルを
放り出すと
麦笛をびいびい鳴らしながら
ま新しい理科図鑑をかかえて
庭のハシゴをのぼった

のぼり詰めれば二階の屋根ほどの
高さにもなるハシゴの
中段あたりに腰を落とすと
新しいインクの匂いのする図鑑の
色刷りのページを
次々に繰っていった

ミトコンドリア
ゾウリムシ
ミドリムシの鞭毛のキラキラ

はつきりと
彼らが歌っているのだと知れた
彼らの葉脈が
彼らのハタめきが

〈地球の命は百億年〉
〈地球の命は百億年〉
と歌いながら
ぼくに囁きかける

と、蒼く光り始めたシダの葉たちの
真中あたりにあって
ぼくはハシゴもろとも
コマとなって回り出した
グルグルと、クルクルと
カラカラと、コロコロと
もの凄いスピードであるのか

主根、側根、気孔の直列
つのとんぼ、はさみむし
おおかみきりの変身

すっかり有頂天になった
ぼくの耳の傍には
屋根を越えて

古生代から根付いてきたという
シダがハタハタ風に靡いていたが

〈地球の命は百億年〉
〈地球の命は百億年〉

という声が
シダがハタハタ鳴るたびに聞こえ
それは

おそろしくゆったりした
スピードであるのかわからないまま
カタカタと、キュルキュルと
シュルシュルと、ゴトゴトゴトと
回り始めたのだ

腰を抜かさんばかりのぼくは
思わず必死に手を伸ばし
なにかをかを掴もうと
父や母の
名を呼んだ

〈地球の命は百億年〉
〈地球の命は百億年〉
空が斜めになったり
地面が後ろになったり
ハシゴがみしり、みしりと揺れ
なにかの渦巻きの中に放り出され
ぼくは、いっそう

父や母の名をしきりに呼び
なにものかを必死に掴もうと
するのだが

ぼくの指は

新しいインクの匂いのする凶鑑の
ページをしつかりと開いたまま

シダのハタめきが

密やかに

激しい熱情を込めたことばで歌う声を

大音量のスピーカーでも

聞くかのごとく

まるで慎ましやかに

背筋をすつと伸ばした姿勢のままに

ただ聞いているしかなかった

〈地球の命は百億年〉

〈地球の命は百億年〉

これを永遠というのか

これでは永遠とはいえないのか
もう、激しく聞きたくて

父や母の

名をしきりに呼んだ

これを永遠というのか

これでは永遠とはいえないのか

もう、激しく真摯な声を聞きたくて

ぼくは、ハシゴの中段に立ち

頑是なく

麦笛をびいびい鳴らしながら

ミドリムシの鞭毛のキラキラを

うち振りうち叩き

どんどんどどどと揺らし続けた

永 遠

永遠の愛

永遠の微笑

永遠の真理

永遠の生命

永遠とは

永遠の友

永遠の美女

永遠の思い出

永遠の誓い

永遠の契り

永遠の旅

永遠の眠り

永遠とは

永遠の闇

永遠の謎

永遠の光

永遠の輝き

永遠の時間

永遠とは

十万回の生死

人は十万回生まれ変わるとい
説がある

三百年おきに十万回生まれ変わる
としたら

三千万年を要する
いや、三千万年しか要しない

十万回生まれ変わる
ということからして不確かな
話であるが

一回きりでしかない
ということにも
頷けないものがある

一回きりでしかないとしたら
どうしてこう

不器用な生き方をしたりするのか
生まれてすぐに命を落としたり
疫病にかかったり
誤爆で手足を吹き飛ばされたり
なぜ餓死したりするのか

と思えば
七色の籠の中で育てられ
颯爽とパリの街を闊歩し
晩餐会で
優雅にシャンパンを傾けたりする

あるいは

野良犬に生まれれたり
蝸牛に生まれたり
ペンペン草に生まれたりもする

これはなぜだ
どういう仕組みなのだ

われわれは
いったいどこから来て
どこへ去るのか
なんのために来て
どのように果てるのか

こんなことを考えること自体
そろそろ出口の方が近くなった
せいだとの説もあるが
このことを
生まれたときから考えていた
生まれたときから

いつも同じことばかり考えていた
ひよっとしたら
一刻、一刻に
生死があるのかもしれないと
真剣に考えていたときもあつた

結局、十万回という説も
ただ一回きりという説も
そのまま、きつちり正しいのだと思う
今与えられている生の中で
考えられ得る限りの叡智をもって
考察したにしろ
この今の一回の生を
過ぎていかねばならないことは
疑いようもない事実であるのだから

生きているから

何者かに追われ

危機一髪のところまで逃げおさせた
という瞬間に目が醒める

よくあることで

そんなときに限って

たいてい頭が混乱している
だから

また朝の野郎がきやがった
などと悪態をついてしまう

こんな鈍とした朝は

恨みの一つ、二つは言いたいもので

なんで今日は月曜日なんだ

などと当たりちらしてしまう

講演会で聞いたり

本を読んで感服したり

友人に励まされ

「生かされてるんだよ」

と心から納得していてさえ

こうなのだ

普通に歩ける

普通に話ができる

普通に食べられる

これがどんなに奇跡的な

ことであるのかわかっていながら

すっぽり

中東や東南アジアの国々の

ことなどが

抜け落ちてしまっている

どこからきたのか

講演会で聞いたり

本を読んで感服したり

友人に励まされ

「生きているから辛いんだよ」

と心から納得し

他にも伝えたりしているのに

こうなのだ

であるのに

「蠟燭の火を消しましょうか」

というサインでも

察知しようものなら

ナンマイダ、ナンマイダを

百万遍でも唱えたりする

手や足の一、二本

へし折ってもらっても構わないから

などという

交換条件を出したりする

あまつさえ

なんというツキのなさだと

四六時中頭の中は

蒼黒い思いでいっぱいだ

なんとか歩ける

なんとか話ができる

なんとか食べられる

これがどんなに奇跡的な

ことであるのかわかっており

講演会で聞いたり

本を読んで感服したり

友人に励まされ

「生きているからいろいろあるんだよ」

と心から納得している

筈であるというのに

朝 日

五月、その強烈なエネルギーが
窓を突き抜けてくる
まだ五時だというのに

金色の、原初の太陽が燃えさかる
そのままの荒々しい混沌の炎の矢が
真っ直ぐに放たれる

太陽は今
壮年期にさしかかったばかりで
なんともやんちゃな暴れん坊だ

勢い余るエネルギーを
持て余し気味に
さあ、これからどんな冒険を
楽しもうかとルンルンだ

五月の朝の窓に炸裂する
光の玉の荒々しさは

彼が四圍に向けて発する雄叫びであり
彼に与えられた激しい生の
燃焼でもある

五月の朝の
全てを燃やし尽くさんばかりの
やけに明るい混沌の炎の色を
指笛を鳴らし、迎え、喝采しよう

太陽よ、大志を抱け
真っ直ぐに、荒々しく、洋々と
愚直そのままに生き抜け

雨

雨はどこから降るのだろう
と目を凝らして見上げていた頃がある

空から、いや雲から、と教わった

空をじっと見上げた
次に、雲を何時間も追いかけた

しかし、何度見ても空も、雲も
雨粒を放っているとは見えなかった

氷が途中で溶けて
雨になるのだとも聞いた

となれば、空中に氷を放つ
威勢のよい掛け声が聞こえてきても

よさそうだ

雨はどこから降るのだろう

もの思いに沈んでいるときに降る青い雨
ダンスでもしたくなる気分の甘い雨
雨蛙の合唱につられて降り出す頓馬な雨

赤や黄色のパラソルによく映る雨
谷合いの橋を横切る静かな雨
紫陽花の葉をボトボト揺らす白い雨

雨はどこから降るのだろう
と今も目を凝らして見上げている

十一月

十一月の声を聞くと
いつも安堵する
寒がきつちりしまり
空が高い

なにより十一月は
紅葉の朱
青一色の空を
紅葉が鮮やかな文様で
みずみずしく
華やかに染めあげる
ほどよく色づき
繊細に開いた葉のかたち
枝々が伸び
鈍色の伽藍の屋根が光る

十一月は
薄の群れ
山頂から麓に下れば
あたり一面に銀狐がそよぐ
銀狐が招こうとする
ほんとうに招かれ
峰の反対側に
歩いていったりもする

十一月は
虫の声
古都の礎石に佇めば
千年、二千年
鳴き続けてきた虫たちが
一夜の宴を
繰り広げるために

あちらからこちらから
ひよいと扉を開け
やってくる
それは実に
それは実に妙なる
シンフォニー

十一月は
熟柿の実
葉を落としかけた枝に
二つ、五つ、七つ
熟柿が輝る
実の一つ一つには
陽光がたつぷり潜り込み
とてもぬくぬくと
嬉し気に
楽し気に笑っている

十一月は
古びた農家の縁先

すっかり年老いた猫が
昼寝をしている
蠅が白髪 of 髭のまわりを
うるさく飛び交っても
大きなあくびを
一つするだけ
たまには
ピクリと前足の爪先を
動かしたりする

十一月は
一番星
そろそろシリウスや
リゲルが顔を見せる
もちろんベガやアルタイルも
健在だから
指さしてみるといい
夜空はほら
星達の賑やかなおしゃべりで
交通整理が必要なほど

賑わっている

十一月になると

なにがなしに

嬉しくなる

空は高いけれど

とても身近に下りてくるし

柿の葉はまばらになるけれど

もう新芽の支度で忙しい

十一月は

見えないところで

命と命が

せっせっせと

引き継ぎに忙しい

十一月には

せっせっせと

なにかが生まれ出ようとする

気配がいつぱい詰まっている

記憶

書けないとなると

一字すら書けないものだ

ぼんやりと呆けながら

ときには

銀河系の裏側まで

ぶらぶら

彷徨ったものだ

そこで

二十四歳のとき死んだ俺の

ふやけた目玉を

くるくる回したりした

しかし、俺は

本当は

三百年もとまらない

クシヤミを止めるため

目の前の足の裏をくすぐって

ほしかったのだ

表現

難しいと思えば

これほど難しいものはない

それも、なんのために表現するのか
となるとやっかいだ

文芸面に限っていえば

表現したいからするのであり
なにをどう表現するのか
と問われると

もう立ち止まってしまふ

そんなことを

表現してよいと思うのか

そんなことが表現であり得るのか

そんな表現が許されていいのか

などと質問攻めにあい

あるいは詰問となり

あるいは完全無視となり

あるいは恫喝となる

表現することとは

単にペーパー上に文字を並べたり

巧みに文字を操ったり

することだけではないだろう

思い、語り、文字にすることで

他の目に止まるようにする

ことには違いないが

思い、語り、文字にするときには

ぼくらを包む天の波動の中に

どこからきたのか

それらを既に

きっかりと放出しているのだ

そう思う

はたして

表現してもよいのか

そんな表現が許されてよいのか

そんな稚拙な表現でよいのか

などという問題は残るが

天に向かって

己の思いを突き上げ

思いを刻み込むのだから

もう、右や左への遠慮などせず

思い切ってやってみればよい

思い、語り、文字にすることで

天に向かって

己の思いのたけを

存分に語ってみるがよい

ぼくらがなにを思い

なにに泣き

なにに嬉し涙を流しているのか

存外天は知っていたがっているの

かもしれないのだ

タイムカプセル

いつの時に沈められたのか
いつの時に開かれたのか

タイムカプセルに乗り
現れ出た夢を見た
夕べでも夜更けでもない
真昼の夢であった

空気の壁をすりと抜け
ほんの間近の空間から
ひよいと出てきた

ずい分と長く遠い空を
飛んできたという
記憶はあるけれど
ほんの先刻に

ふっと現れたただけだ

なにくれと緻密な長い訓練を
してきたのだったという

記憶もあるけれど
ほんの先刻に
ふって湧いたただけだ

つるつるてんの

白い衣に包まれた

童に似た

女にも似た

かたちをもち

額に刻んだからという

遠いかすかな声を最後に

なにも聞こえない
なにも見えない

空気の襞をぐるりと
すり抜け

観音開きの
細い隙間をくぐり抜け
ひよっこり出てきた

ここはどこ
ここはいつ
ここはなに

羅針盤

定めない暮らしをしてきた
定めないケンカをしてきた

いきりたっていた
四方に牙を剥いていた

二十四歳で死ぬと決めた
しかし

いざとなると崖っぷちから
引き返した

これが俺
これが俺の履歴書

いつの間にか家族ができた
いつの間にか田舎を捨てた

いつの間にか臆病風に
とりつかれた

だがもともと臆病者だった
小さなケンカを売っては
ひたすら逃げた

お前はなにほどの者だと
自分にケチをつけた
俺はなぜこうしていたらしく
なんだと運命を呪った
ただケチをつけることで
逃げをうった

これが俺
これが俺の履歴書

羊の顔をした狼
狼の爪をもった偽うさぎ

てんでめちやくちやに
仕事に打ち込んだ
打ち込んだ振りをした
好きでもない仕事を
これ見よがしにやってきた

嫌な顔の
嫌な性格の問題野郎

これが俺
これが俺の履歴書

いつの間にか家族ができ
いつの間にか田舎を捨て
いつの間にか小さな砦に
閉じ籠もってしまった

これが俺
これが俺の履歴書

羅針盤というものを
見たことがない
そんなものなど不要だと
片手に握りかけたものを
放り投げたのだったか

いつも酩酊していた
酩酊することで荒んで逃げた

だからこれが俺
だからこれが俺の履歴書

彷徨い流浪い
行方知れず舵を切る
俺の道を俺の道へ
今も今もこの今も

確 率

正しい定義も知らないのに
確率ということを考えている

生まれる確率、出会う確率

その親から生まれる確率

その親になる確率

ただそれだけの問いを發した
だけであるのに

もうこれは、計算の対象では
なくなる

そのほかに、ほんの数点の条件を
加えただけで

頭が爆発しそうになる

こんな他愛もない日常に暮らして
いるというのに

とんでもない確率の

その確率が生み出す

さらにとんでもない確率の中にある

とでもいわないことには

もう始末におえない

ところで、人類が宇宙人に出会う

確率はどんなだろう

宇宙がくしゃみ一つする時間に

遅れただけで

宇宙人はとんでもない時間の

彼方に移動している

はたして一点で交わるといふ

確率などあり得るのだろうか

それより、人類が存在する時間など

宇宙のモノサシで見れば

どんな微少な単位であるのだろうか

いや、微少であるのか

微少でさええないのか

確率なんかではない

ほかのモノで量るべきなのだろうか

目 眩

鳥インフルエンザの次は
豚インフルエンザだという

空港や街中で
マスクをかけた人を多く見る

防御のためとはいいい
ギョツとするのは否めない

顔が見えない
表情が見えない

サリン事件のときと同じの
防毒マスク姿を思い浮かべる

必定というべきか

異常というべきか

人はこれまで
空気や水はただなのだ
と思ってきた筈だ

水がダメ
空気がダメだとなると

次はなんだと
考えてしまう

復活の日という小説があった
もの心つくころから

同様の光景を
夢の中で何度も見た

どこからきたのか

これは何だ
これはどういうことだ

マヤやインカの礎石群などは
いったい何を語っているのか

マスクで溢れた街中の
表情のない人の目の色に
会ったたびに

激しい目眩に襲われる
これは
いったい何故だろう

インフルエンザ考

ものものしい防毒マスク
に身を包み
航空機の中をチェックする
水際作戦に失敗すると
今度は外国旅行者か
外国人かとする
今はもう国内感染であろうというのに
懲りずに外国旅行者や
外国人を追跡する

どこの学校のどこの何人が感染と
島国ならではのトップニュースだ
誠に極上サービスこの上ない
この報道によって
犯人に仕立て上げられたり
近所からいわれのない批判や

指弾を受ける人々があることに
はたして思いをいたしたり
することがあるのだろうか

この国の役所に
この国の報道姿勢に
はたして真を感じ得るだろうか
無責任な責任逃れの
バラエティーの延長の
まるで天が降ってくる式の
無軌道ぶりではないか

勿論もう間近に
天が降ってくるに違いない
その真のことの方を
心を空しうして知るべきだ

失っている

失っているものはいしてない
筈であるのに
確かになにかを失っている
そんな気がする
金でもなければ立場でもない
そんなものはとうに
持ち合わせていないのだから
もつとも、時間でも健康でもない

神や、仏の説を借りれば、
始めもなく終わりもない
ということになるのらしいが
でも、やはりなにかを失っている
そんな気がする

たとえば一本の蠟燭が

静かに燃え退がる
燃え退がった蠟燭の
燃えてしまったあたりの形は
もう失ってしまったのだ
と勘定するのだろうか
蠟燭の一本の形は
どんなに燃え退がろうとも
心のうちにはありありと
そこにあるというのに

始めもなく終わりもない
全ての全てを内包するという
カミヤ、ホトケたち自らは
蠟燭の一本を
どのように燃やすと
いうのだろうか

系 図

娘が身籠もって子を産む

その子には胤がないため

養子をもらい

嫁が身籠もって子を産む

嫁の子は

あちこちに胤を蒔き

母親の違う子が九人産まれる

母親の違う子たちは娘を娶り

男に嫁ぎ

四十五人の子が産まれる

四十五人の子らたちは娘を娶り

男に嫁ぎ

父親の違う子や

母親の違う子や

髪の色が違う子や

違うことばを喋る子らが

二百六十一人産まれる

二百六十一人の子たちは娘を娶り

男に嫁ぎ

あるいは娘を娶ることもせず

男に嫁ぐこともせず

日の出る国や

日の沈む国で

千三百二十三人が産まれる

ここまでは世間を騒がせた男や

火を点けて逃げた女もいて

どこからきたのか

もつとも

本家筋はどうに途絶えていて

系図はボロ布同然に

倉の内に眠り

なにが初めで

誰と誰がどう絡み合って

どう転がっていったのかなど

斟酌する余地もない

少しばかり財をなした男は

伽藍をめぐらせ

べたべた女の尻を撫で

女は女で

九十になっても

厚い口紅をさすことを

一時も忘れやしない

世界のどこかで

体に爆弾を巻き付け
多くの人で溢れかえる建物に突っ込み
自らの血肉とともに
数え切れないほどの人々の血肉を
一気に吹き飛ばす
そのとき自らの魂は
どこでなにをしているのか
吹き飛ばされた多くの人々の魂は
どこからどこにいったのか
いったいこれはなんだ
誰がそんなことを命じたというのか
部族の威信をかけて
なにかを得ようというのか
欲か、徳か、正義か、恨みか
英雄になるためにか

体に爆弾を巻き付けるとき
母の声は聞こえなかったか
恋人の声は聞こえなかったか
敵討ちの敵討ちのそのまた敵討ちの
敵討ちではないのか
爆弾を巻き付けるためだけに
生まれてきたというのか
体はうち震えなかったか
心はうち塞がれなかったか
流す涙は枯れ果ててしまったのか

戻ることのない車が動き出したとき
故郷の川のせせらぎは聞こえなかったか
恋人の声は聞こえなかったか
母の子守歌は聞こえなかったか
天上の音曲はなにも聞こえなかったか

光さす

天上からの真白な光に
洪水のごとく惜しげもなく
降り注いでくる光に
そのまま打たれるとき
天上のものと一体となる

欲得でしか動くことのない身には
眩しすぎるのかもしれない
あるいは信じられず
見ることができないのかもしれない

天上からの光は
常に降り注いでいるというのに
頭の中に黒雲をつくり
疑念という嵐を起し
怒りや我欲や迷いを発し
頭の上にコンクリートの覆いを
こしらえてしまう

どこからきたのか

天上からの光は常に変わらず
まことに清らかに降り注ぐので

光あれ

光あれと願う
世界が限りなく
一つに近くなり
距離も著しく
縮まったというのに
宗教や民族や部族の
主張激しく
こうも排他排斥ばかりに
躍起になっているのは

単なる
わがままではないか
単なる
仇討ちに過ぎない
ではないか

単なる
もの盗りに過ぎない
ではないか

そんな
怪しげなものを
画策しようとする旗の下
己の意見を
しやりむりに
押し通そうとする

確かに
幾世紀の間
弾圧や搾取のときを
経てきたのかもしれない

今もいわれない差別や
殺戮に見舞われて
いるのかもしれない

しかし
他を抹殺せよと
真の神ならば命ずるであろうか
目には目をと
真の神ならば命ずるであろうか

光あれ
光あれ
光あれかし

この哀しいものたちの
迷える魂を
光よ照らし
道筋を真っ直ぐに
整え示したまえ

光あれば

はるかな宇宙から
光が到達する

百万燭光の電気が百万個
一瞬にはじけ
白いビームとなる

例えていえば
そんなことになる

光の速さを測る
モノサシなどないというから
強いて例えれば
そんなことになる

光のシャワーに

しとど濡れ
頭のでっぺんから爪先まで
しとどに濡れ

悲しい思いや
悲惨な出来事や
思い上がった略奪行為など
全てがしとどに濡れ

瞬時に全てが貫かれ
瞬時に全てが無きものになり
瞬時に全てが有るものになり

名 月

美しい形状の月が薄雲の間を
すごいスピードで駆ける
背景には澄み渡った空
すごいスピードだね
すごいスピードで駆けめぐって
いるのだね

地球と月という惑星同士の
物理運動などというと
情緒など失せてしまうと
このスピードは事実だろう
こんなに猛烈な早さで
互いの均衡を保ちながら
四六時中動いている
その中であって

山は動かず、故郷は変わらず
などというシャッターチャンス
をものにしたかのごとき情感を
人は生み出してきた
人は賢いというべきか
人は賢いというべきか

こんなに猛烈なスピードで
動き、変転しながら
冴えわたるほどに美しい形状を
ときには澄み渡った空に表し
すばらしいシャッターチャンス
をとらえ
天女でしかあり得ないものの姿を
くつきりと見せてくれる

宇宙論

まぶたを閉じると
まっすぐに倒れる棒が見える
水の上で倒れるときもあれば
屋根の上からポトリと落ちるときもある
君が詩人であるなら
あっさりともぶたを閉じてみるがよい
一本の棒の中に
みどり色をした
足の生えた
髪の毛の生えた
翼の生えた
およそ実体のないものたちがいて
メロディとなり
煙の歌を歌い出すのだ

まぶたを閉じれば
決まって
まっすぐに倒れる棒が見える
約定のときになんと素裸で
なんとも豊かな乳房をもち
なんとも美しい唇をもち
なんとも艶やかな声をもち
おんなという名の
およそまことに心を惑わすものたちがいて
苦くて青いドライアイスとなり
奔流となって溢れ出すのだ
まぶたを閉じると
きつと
まっすぐに倒れる棒が見える

星降る

都会の灯りの届かない
漆黒の闇では
星が間近にある
手を伸ばせば届きそうな
ところに浮かんでいて
よくお喋りをする
ほんのすぐ近くだし
囁き声でだって相手に届く
この頃人間はおかしくないか
昔からちつとも
変わりはしないな
どうしたら、ああも強欲で
横暴で、冷血を貫けるんだ
あんまり見境がつかない

ままだと
今度もリセットだよな
星たちの話題は尽きない
だって、星たちは
ほんの近くから
何でも見てるし
何でもよく知っている
今夜も星たちのお喋りで
闇はぎらぎら輝き
陽気な星たちは
上に、下に、斜めに
時間、空間を突き抜け
気の向くままに
滑空を楽しんでいる

天象

荒々しい風が吹きすさぶという
冥界や天界を渡ってきたのであろう
一個の星
いや、一個の塊の
風雪に耐えてきた磨崖仏にも似た
表情をたたえた石が落ちてくる
疲れたのだ
もう、ようやく約束の
長い旅に終わりを告げるのだ
もう、ようやく自らが飛び込んだ
激しい闘いのくびきから
解き放たれるのだ
ガス雲などという
激しい思春期を過ごし

数え切れないほどの星々を束ね
はなばなしく
あたり中の星団を率いていたこともあった
考え得る限り凶暴な
時空という堅牢な砦を構え
血も涙もない
どこまでも冷酷無比な
どこまでも黒々とした
野望を抱いて燃え滾っていた
三十億年もの間一瞬として眠る間もなく
三十億年もの間一瞬として振り向くこともなく
三十億年もの間一瞬として飽くこともなく
その疲れは

どこからきたのか

たとえ、千人の裸婦を侍らせようとも
たとえ、天上の曲を雨と降らせようとも
固い殻を破ることはおろか
ひび割れ一つ
作ることさえできなかった
硬直した
鉄壁の砦には
一匹の蟻
一滴の露
一条の光の
なに一つ入り込む隙なく
凍て付いてしまった
しかし、超新星爆発などという
ビッグバンにも比類する
理不尽な破壊が待っていた
圧倒的に強力な
完璧なまでに冷徹な
しつぱ返しが待っていた

砦を失い
全てを失い
一個の星となり
一個の石ころとなり
命運の尽きた果てに戻るといふ
懐かしいふるさとの
大気圏に突入し
骨灰と帰す
そのときを待っている
落魄の果て
いつの間にか
いや、いつか
磨崖仏にも似た顔をつぶされ
照れ笑いだけを浮かべ
ひたすら大気圏に突入する
そのときを待っている

無間

このつかの間の時間に
私は多くのことを
やりとおせねばならない

焼き場で

ただひとにぎりの骨灰となつて
かえつてくる地球の
ふしぶしのささめきを
疲れた

この疑似楕円軌道から
ゆるやかにとき放し
せめてなま温かい
時の笹鳴きの彼方に
後ろ向きに
投げ入れてやろうとする

かつて

糜爛した青臭い
食欲や性欲をみたしたという
蜥蜴や猿や

鱗木やアンモナイトなどという

卑小なものたちの

ささやかな老後の夢は

たったこれだけの

一片の死亡届で

ピンポン玉のごとくに

弾けとんでしまった

私は

カネテ病気療養中ノトコロ
などと書き送るつもりはない
なぐさめにもなりはしない

どこからきたのか

どこへ歩いていったか
などという
しらじらしい題目は
その十字路をかつてに
ころがっていくがいい
今日のしがらみに

まん幕の張りめぐらされた
うす暗い部屋のかたすみで
冷えびえとかじかんだ
私のミイラをなでながら
死に絶えてしまった
惑星たちの覚え書きを
あてのないタイムカプセルに
乗せようとする

(西暦何年などという
他愛のない奥付けを記そうか)
それにしても
今はいまからあとなのか

まつわりとどまろうとする
みずの流れのごとくに
まつわりつくことのできないことに
まつわりとどまろうとする
もろもろのミイラたちよ
ホトケたちよ
ガラスのごときものたちよ

足がない
手がない
口がない
耳がない
吹きとばそうとする亡者さえもない
なんという形象だ
底も、天井も
闇も、星たちも、
時のながれも
三十億光年の彼方に向けて
すでに

茫々となだれ果ててしまった

私はいま

刈られたすどい

手首の痛みに耐えながら

このおびただしい堆積物の中から

乱雑に散らされた過去帳の

ひとつひとつをめぐりだそうとする

はるかなゆかしい

心臓の所有者であつたものたちへ

うごめく

ひかりなどと呼ばれる実体であつた

ものたちへ

いま私は

ひとり心せきながら

いち枚の乾いたはなびらを

そらにながそうとする

山は青いか

山は青いか

太郎が見上げている

山は青いか

次郎が見上げている

山は青いか

三郎が見上げている

山は本当に青いか

ブラックホール

放蕩の限りを尽くし
暴虐の限りを尽くし
淫蕩の限りを尽くし
詐術を駆使した物盗りや
刃物や飛び道具や
怪しいクスリを用いた
容赦ない殺生などを
平氣の平座でやってきた

国のため
家のため
名誉のため
地位のため
金のため
女のため
男のため

親のため
子孫のため
先祖のため

国家の安寧のため
部族の安寧のため
自らの安寧のため
教会の繁栄のため

などというあまたの口実で
放蕩の限りを尽くし
暴虐の限りを尽くし
淫蕩の限りを尽くしてきた

しかし今
一つの判定が下されようとしている

山影に幾本もの光が走り
にわかには揺れ動き
海がざわめきだした

人類の繁栄のため
未来の安寧のため
などという麗々しいことばが
発せられて幾久しいが
それらのことばが生みだし
それらのことばが穿ってきたものは
実に自らの足元をどンドン
食いちぎることばかりではなかったか

間近に迫ってきている
巨大なものの姿は見えない
見たものなどいない

透明な空気や
透明な宙の彼方に
それはあるという

命あるものを

正しく権威あるものを
暴虐の限りを尽くした

猛々しいものを
愛しく美しいものを

巨大な神殿を
海を山を
月を星たちを

見えないものが
すっぽりと包み込んでしまう
見えないものが
すつと通り過ぎてしまう

見えないものが
見えないものそのままに
静かに通り過ぎてしまう

海の座標

はるかに遠い時を経て
はかりしれないほどの
あまたのいのちあるものを
育んできた

いのちあるものが生まれ
いのちあるものが水を切り
いのちあるものが陸にのぼり
いのちあるものが空にのぼった

いのちあるものが目覚め
いのちあるものが跳ね上がり
いのちあるものが歌うたい
いのちあるものが
いつしか永久の眠りにつく

はかりしれないほどの
あまたのいのちあるものを
育んできた

いのちあるものが生まれ
いのちあるものが水を切り
いのちあるものが跳ね上がり
いのちあるものが歌うたい
いのちあるものが
いつしか永久の眠りにつく

底の底には
いのちあつたものたちが
おびただしい骸となり
水のごとくに溶け合い

底の底から
新たないのちあるものが生まれ
いのちあるものが水を切り
いのちあるものが跳ね上がる

風と接し
雲と接し
空と接し
月や星と接し
幾条もの水脈を引き

炎のごとく狂おしく荒れ
烈火のごとく怒り哮り
なにごともなかったかのごとくに
鎮まり

幾日も幾日も
油を流したかのごとくに
穏やかにたゆたう
そんなはるかに遠い時を経て

ときには烈火のごとく怒り哮り
空の高みまで
波濤をとばしたかと思えば
来る日も来る日も
油を流したかのごとくに
穏やかに澄み渡る

空と接し
幾条もの水脈を引き
月や星たちと
のんびりと話し込んだりもする

底の底では
骸たちが水のごとくに溶けゆき
底の底では新たに
いのちあるものが生まれつつあり

うつろい

知らぬ間に草が被い
知らぬ間に道が途絶える
かつて田圃に水を張り
かつて共同墓地の入口だった
ほんの五年ぐらいでこうだから
まして二十年後五十年後のことなどは
考えられない

今日明日のことに必死で
生きている
今日明日のことだけで
先のことにもまで思いが及ばない
心が非情になったのか

我が儘になってしまったのか
瞬時にニュースが駆けめぐり
瞬時に世界が動転する
アナログからデジタルへ
田圃にアナログを当てはめたとして
共同墓地にデジタルを当てはめたとして

明日のことも
五年後のこともわからない
今日明日のことだけに懸命で
先のことにもまで思いが及ばない

恐竜伝（一）

一億年もの風雪に耐え抜いた
巨大な議事堂の苔むした議場では
首相のツノメザウルスの長老が
いかめしい角をそびやかし
降り注ぐライトの中を
ゆっくと演壇に歩み寄った

見よ、われわれの上に
戦禍の時代が過ぎて久しい
われわれ民族は
英知と、博愛と
血を啜るかのごとき犠牲とによって
永久の平和を確立した
神の姿に最も近い
われわれの前途には

果てしない永劫の未来が
約束されている
首相は
やおらこぶしを天に振り上げ
カメラのフラッシュが
燦然と焚かれる瞬間に身構えた

燦然と
燦然と
その地鳴りのごとき
瞬間が焚かれた

恐竜伝 (二)

いつもの夕暮れは
すぐそこまできていた

薄野には
やわらかい風が
静かに吹きわたっていた

神の姿に最も近い
といわれる

アニメサウルスの街では
林立するビル
屋上に立てば

薄野の風景も
エンジン音を
たてることなくすべりゆく
勤め帰りの車の列も

動脈硬化などという病は
とうに過去のものとなった

衣食にもこと欠くことなく
地が揺れ
水がおどるといふことなど
聞いたこともないから
平均寿命は
八百歳をとうに越えている

たまに老眼を過信し
階段を踏み外したりして
転げ落ちたりするのが
死因の第一位で
後は寿命を待つ
ほかない

神の姿に最も近い
といわれる
アニメサウルスたちは

手に取るごとく
間近に見えた

ことばを発することなく
意志の伝達をすることができ
よって民族間の

トラブルは霧消し
トラブルといえるのは
髭が伸び過ぎ
舌が肥え過ぎた
ということぐらいだった

精神に破綻をきたす
者もなく
悪性腫瘍や
インフルエンザや

選ばれた種としての
誇りを胸に

種をあげた技術と知力の
限りを尽くし
雲を突き抜け
天にまで至ろうとする
塔を無数にこしらえてきた

神の姿に最も近い
といわれる
アニメサウルスにとっては
それはしごく
当然のこと

国民会議が
総力をあげて策定した
新たな塔が
十年の歳月を経て
竣功し

今夕

お披露目をするため

薄野を眼下に見下ろす

位置に

アニヌメサウルスの長が立ち

感謝の祈りを

始めようとしていた

胸を轟かせながら
新しい塔を見上げていた
臨月のアニヌメサウルスたちは
そのまま
前脚を二つに折った
そのままの姿勢で
化石した

と思うと

〈食らうがいい〉

〈食らうがいい〉

と眠たそうな声が

どこからか歌い始め

〈ふむふむ〉

と波のごとくに笑い始めた

と、いきなり空が裂け

おどろおどろしい声が

〈去れ〉

ともの憂げに囁いた